

浄土教における仏と人間

曾和義宏（佛教大学）

浄土教において、人間は阿弥陀仏という救済者と対峙するかたちで定義される。本発表では、中国唐代の善導（613-681）の思想と、浄土宗の開祖、法然（1133-1212）による善導思想の受容から、「人間とは何か」について考えてみたい。

一．阿弥陀仏との隔絶

善導は、極楽に在す阿弥陀仏を報身と規定する際に『無量寿経』を引き、「菩薩の道を行じたまいし時」と述べ、「いま既に成仏したまう」と説明する。救いを求める人間にとっては「いま」が重要なのであり、過去や未来ではない。その「いま」において、阿弥陀仏は「既に」成仏している存在なのである。つまり、同じく解脱を求める存在として、阿弥陀仏は「既に」その目的を達成した存在であり、未だ解脱を得られていない者にとっては、時間的に決して追いつけない隔絶が存在するのである。

また「阿弥陀仏と極楽が報仏報土であるならば、垢障の凡夫はどのようにしてその世界に入れるのか」という問に対し、「衆生の垢障を論じたならば、欣趣することは難しい」と断じている。また阿弥陀仏入涅槃説について、「涅槃に入る、入らないは諸仏の境界であって、三乗の浅智で窺い知ることはできない」とも言う。これらは阿弥陀仏と人間の隔絶を示すものである。

二．阿弥陀仏との関係性

善導は阿弥陀仏と人間との間に、三縁という関係性が成立すると述べる。この三縁という関係性は感応思想の一種であると言える。しかし感応思想が機を問題にするのに対して、善導は「念仏衆生」との間に三縁が成立するとし、仏に対する働きかけを機から行に転換している。このことは阿弥陀仏（法蔵菩薩）自身によって、その誓願として表明されており、それは「いま既に成仏している」と説くことで、真実であることが示されている。また念仏行者は三心を発することが求められるが、それらも成仏した、すなわち宗教的真実を獲得した阿弥陀仏の存在を前提として論じられている。特に「自身は『遙か昔から』煩惱具足の凡夫である」とする信機は、「いま既に成仏」している阿弥陀仏の視線があつてのものである。

三．阿弥陀仏の視線

善導は、阿弥陀仏が称名念仏を人間が自らに働き掛けるための行としたことについて説明をしていないが、法然は「平等の慈悲に催され普く一切を救わんがため」として述べている。つまり平等ということが阿弥陀仏の視線である。善導は平等の救済を「五乗齊入」と述べる。阿弥陀仏は既に菩薩行を完遂して、いまだ完遂できていない人間と隔絶した存在であるからこそ、すべてを平等に見て救済することができる、としているのである。

善導は、このように仏と人間の隔絶と、本願念仏を媒介とした呼応関係の成立を説くが、人間同士の関係性についてはどのように述べているのか。その一つとして「慈心相向、仏眼相看」ということが挙げられる。これは『法事讃』巻上、『観経疏』後序、『往生礼讃』広懺悔で述べる表現である。仏と隔絶しているはずの人間に、仏のように慈悲をもって向かいあい、仏眼をもって互いに看ることを述べているのである。これは自分自身に対しては、仏の視線でどのように見られているのか意識させ、他人を見る場合は平等の慈悲をもって見るように求めているものだと理解できる。

そのような善導の理解は現代において通用するのか。この疑問に対しては「韋提希は凡夫である」という理解が答えとなる。人間に潜む凡夫性が人間の本質の一つであると指摘しているのである。

「宗教の文脈を使用することなく人間を語るという姿勢」に揺らぎが生じているという現代こそ、改めて「宗教の文脈を使用して人間を語るという姿勢」に立ち戻ることによって、「人間定義の新次元」が見えてくるものと思う。

キーワード：阿弥陀仏、三縁、深心